

【インタビュー・シリーズ 夢プロジェクト】

世界に発信する アーティストたち

No.2 杉澤友佳 YUKA SUGISAWA



日本画とペン画の融合した絵画空間を描き出す、
杉澤友佳
チャレンジ精神旺盛な若手気鋭アーティスト

自分らしい表現を模索する中で、日本画の画面の中にペン画の表現を取り入れた杉澤友佳。岩絵具の堅牢な素材に対して、ペンはあまりにも弱い存在だったため、並立させるのにさまざまな試行錯誤を経たという。ここにきて納得のいく世界が表現できるようになった。それは本来、杉澤友佳が幼いころから持っていた、徹底的に描き込まないと絵が終わらないという本性に根ざした表現でもあったからだろう。



《正午過ぎ》50M

が、何も見ないでフリーハンドでペンを立ててカリカリと端から描いていきます。自分の制作スタイルが、ずっと空間恐怖症みたいなのが続いていて、端から端まで埋めたいという気持ちには、小さい時からずっと変わらないういんです。

—— 顔の部分は一番最後なんですか。

杉澤 1ヶ月制作していて顔描くのは最後の2日間くらいです。最後の最後まで真っ白なんです。顔だけはデッサンの段階でき

ちつとできていて、後は描くだけなんです。模様とかその模様の色は描きながら決めて行くのですが、そこだけが異様に時間がかかるわけです。

—— 最近の作品は、顔が美しいですけど、八王子市夢美術館の頃とは変わりましたね。あれは老人の顔じゃなかったですか。

杉澤 自分で考えた顔を適当に描くとああいう顔になっちゃって、すごい不評だったんです。気持ち悪いとか。だから綺麗な人を書いてやろうと、それで一



(N) 42 × 29.7

今まで誰も見たことのない、 どこにもなかった作品を創りたい

一般的な綺麗だといわれているものをちょっと描いてみようと思った。ですから一応モデルは使っていて、写真をたくさん出して、その中から自分で好きなようにデッサンをして形を作っていくんです。

—— 作品の制作に時間がかかるということですが、展示会へも着実に出品なさっていますか、今年の11月、海外のアートフェア、台湾の Art Taipei への出品依頼もあるそうですね。

杉澤 そういふ話も頂いていますが、あんまり作家として生きて行こうという気持ちがメイン

—— 杉澤さんの、ペンを使った作品を初めて見たのは、八王子市夢美術館の「夢美エンナーレ」で2011年に奨励賞を受賞なさった作品でしたが、あの頃から、ペンの表現を取り入れ始めたんですか。

杉澤 何作か実験的にペンの作品を描いた後、出品しました。あの奨励賞の受賞もまだ形にならなくて、試行錯誤していた最初の頃の作品です。

—— 本来の日本画の中に部分的にペンで描いていくという作品ですが、難しいことなんですか。

杉澤 やりにくいですね。ペンは日本画の画材に比べてすごく弱いので、岩絵具と比べると本当に負けてしまいますから、その強弱のバランスをどうするかとか、和紙とペンの相性を考えたり、描く順番をいろいろ考えないと、本当にペン自体が岩絵具で削れちゃってボロボロになってしまいます。ですからペンは岩絵具の上は無理で、和紙の地の上に描くことになりました。そういうことを考えながら、

どこに岩絵具を置いて、ペンをどう配置するとかいろいろ考えるんです。

—— 日本画とペン画と融合して新しい日本画を作ろうという方向はどのようにして思いついたのですか。

杉澤 常に新しいことをしてみたいと考えていて自分の絵の方向性を探しているという中で、大学の学部の時から、作品に布を張ってみたりとか、色鉛筆と岩絵具を合わせてみたり、いろんなことをやっているその延長線上にペンもあったということなんです。たまたま、3年くらい前にペン画の展示を見たのがきっかけでしたが、私にとっては特別なことではなくて、これからは別の素材を見つけたらそれを使ってチェンジしていくかもしれないですね。

—— そのペンで描く部分が、けっこう緻密な線で時間がかかる仕事ですね。

杉澤 絵の中で一番時間がかかります。ペンのところだけは0.2ミリのペンを使って描きます



〈ちと〉 P 20号

略歴
 1986年 神奈川県生まれ
 2009・11年 八王子夢美エンナーレ奨励賞
 2010年 多摩美術大学 絵画学科日本画専攻卒業
 2010年 グループ展「日本画6人展」(RISE GALLERY/ 目黒)
 2011年 多摩美術大学大学院日本画・版画展 (佐藤美術館)
 2012年 多摩美術大学 大学院博士前期課程研究領域日本画 修了
 2012年 個展「杉澤友佳展」(exhibit Live&Moris gallery/ 銀座)
 2012年 「野田 琢 小笠原 雄介 杉澤 友佳」若手作家3人による現代の女性を描く展 (軽井沢ニューアートミュージアム1F ギャラリー)
 現在 神奈川県在住

じゃなくて、絵を描くという行為を人間として成長していくというこのツールのひとつみたくに考えていて、

——人間形成の一部として絵を描いていると？

杉澤 そうなんです。いろいろな成長をどんな時でも自分で感じていたいので、それで絵を描いているような感じですよ。

——奥ゆかしいアーティストですね。

杉澤 その反面、バイオリズムの変化からか、海外の展覧会に

出品したい、認められたいという気持ちが無性に強くなることがあります。今、ロンドンオリビックがあるじゃないですか、その表彰台に立っている人が羨ましいと思います(笑い)

——そういう気持ちも大切でしょうね。これから海外に向かうには。

杉澤 何とかなかな、私はずっとスポーツしていて、物事を勝ち負けで考える癖があります。それでやっぱり自分とその他の作品を比較した時に、一瞬で勝

杉澤 出すなら世界だと思っています。でも、今の自分のレベルで評価されるのはどうかなと。今の自分が自分自身で納得がいかないもので、不安もありますね。しかし、いろんな評価をされることはありがたいことですし、批判されればそれがまた成長の糧になりますし、またいろいろなるところに展示して、同じようなレベルの人たちがバートと並ぶとそれだけで自分の足らないところが見えてきます。

——どんなアーティストになりたいという目標はあるのですか。

杉澤 私は今の現代アートというのにはあまり興味がなく、100年くらい前の巨匠たちの傑作、マスターピースのようなものの方がよっぽど価値があると思っています。私が好きなのはクリムトとミュシャと、ウォータールハウスなんですけど、ちょうどウィーンに行った時ミュシャ展をやっていて、日本では集められないような作品が並べられていてそれを見て、とにかく

く上手いなと思った。あの人才は、相当デッサンが上手いし、作品を見て作品で見せて行くのはデッサン力だなと改めて思わされました。今の、海外の現代アートを見てみると、見せ方はとてもうまいんですけど、ぜんぜん面白くない。だから、アカデミック絵画の方がいいですね。

——これからの夢は、そうした作品を制作していくことですか。

杉澤 作品で「何これ！」と言わせたいですね。存在感のある作品を創りたいですね。今、普通の顔を描いていても、それが不思議だという存在感のあるもの。本当にこの絵は杉澤さんの絵だなどという存在感とか、誰もやってないようなことをやりたい。今まで誰も見たことのないような作品を作りたいなど。今までどこにもなかったような作品を作りたいと、それが夢ですね。そして、世界で認められたいというのはあります。

——これからのアートフェアもそうですが、国際的な活躍を期待していますよ。

「ヴェネチアン・グラス 光と影の芸術 土田康彦展」大きな反響を得る



千住博 (左) と土田康彦



展示風景



高梁市成羽美術館の澤原一志館長(左)と土田康彦

軽井沢ニューアートミュージアムで開催されている「ヴェネチアン・グラス 光と影の芸術 土田康彦展」(9月3日まで)は、テレビの取材や美術関係者の訪問、大勢の来館者で大きな反響を読んでいる。ヴェネチアン・グラスの本拠地・ムラノ島(イタリア)にスタジオを構える唯一の日本人アーティストとして海外では有名な存在だったが、今回は、その土田康彦の仕事の全貌を伝える展覧会として、国内でもその存在を大きくアピールした。

会期中は、先輩アーティストとして土田に以前からアドヴァイスをしていた日本画家の千住博が会場を訪ね、旧交を温めていた。また、BSTBSの「職業としての芸術家論」に土田と共に出演した。その他、高梁市成羽美術館の澤原一志館長など、さまざまな美術関係者も訪れ、会場は会期中賑わいを見せていた。

●ヴェネチアン・ガラス 光と影の芸術 土田康彦展 (千住 博展 同時開催)
 9月6日→9月12日 渋谷・東急本店8階 美術画廊(渋谷区)㊤
 【最終日は17時閉場】